

令和7年度

運営に関する計画

最終評価



大阪市立難波元町小学校

大阪市立難波元町小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価 (総括シート)

1 学校運営の中期目標

現状と課題

○ 令和4年度末の保護者アンケートで「学校へ行くのを楽しみにしている」の肯定的な回答が95%であった。令和3年度の89%より6ポイント増加した。理由として、コロナ禍の中での教育活動も3年目を迎え、様々な工夫をしながら学習のみならず行事も実現できたことが考えられる。保護者へのアンケート結果にも「コロナ禍にあってもできるだけ行事を減らさない工夫が感じられる」といった声がよせられている。このような保護者へのアンケート結果に対して、児童へのアンケート結果は次の通りであった。

令和4年度末の児童アンケートで「学校は楽しいですか」の肯定的な回答が94%で、令和3年度が98%からすると4ポイント減少した。

コロナ禍の中で児童の安全・安心を担保して教育活動を推進していることを引き続き発信していく。

○「きまり・規則を守っている」と回答した児童は92%で令和3年度から2ポイント増加した。学校にあるいろいろなきまりを守ることが自分の命や友達の命を守ることにつながるという指導を全校朝会や日々の学級指導で繰り返し指導してきたことが数字に表れた。引き続き、生活指導に関する取り組みを継続し、規範意識をさらに高めていく必要がある。また、きまりがなぜあるのか、どうして守らなければならないのかといった指導を継続していく。

○令和4年度は研究教科を算数とし、研究主題「わかる喜び 学ぶ楽しさ」として、授業研究を推進した。その結果、学力経年調査の標準化得点は令和3年度、算数102.7であったが令和4年度は算数102.4であった。102を維持したというのは大きな成果であると考え。各教員の日々の授業改善と児童理解による良好な人間関係の構築。加えて、脳トレで児童の学びに向かう姿勢作りに取り組んだ事があげられる。

◎脳トレの推進

令和2年度、コロナ禍の影響の中で脳トレを開始。日々の百ます計算と漢字先取り学習をすることで児童の自尊感情を育むことをねらいとした。児童の脳を活性化し、学びに向かう姿勢を形成するために教職員一丸となって「脳トレ」を全学年で実践した。

令和4年度は「音読・計算・漢字」に取り組んだ。計算は3分間の百ます計算。どの計算も、昨日の自分の記録をクリアすることを目標としながら、小学校を卒業する間際までには、どの計算も2分を切ることを目標とした。たし算、ひき算、かけ算、わり算B(余り無し)、わり算A(余り有り)に取り組んだ。引き続き脳トレを推進し、児童の学びに向かう姿勢を形成していく。

【百ます計算で2分を切った児童の割合】

〔百ます計算 種類〕	年度始め	年度終わり
たし算	42%	⇒ 58%
ひき算	47.7%	⇒ 52.3%
かけ算	26.6%	⇒ 73.4%
わり算B(余り無し)	23.4%	⇒ 76.6%
わり算A(余り有り)	0%	⇒ 16.7%

【漢字検定試験の合格率】

- 3年以上の児童が当該学年に相当する漢字検定試験を受験した。
令和4年度の合格率は86.2%であった。前年度の合格率78.2%と比べると8ポイント向上した。
※百ます計算や漢字先取り学習、音読に取り組む脳トレの活動は児童のやればできるという自己肯定感を高めるものになっている。令和4年度は朝の時間帯に位置付けて推進してきた。
- 学力向上推進事業
昨年度に続いて学力推進事業をうけ、月2回程度教育アドバイザーを派遣していただいた。
アドバイザーには、次の3点指導していただいた。
 - ① 若手教員の算数授業の参観並びに指導講話
 - ② 校内算数全体授業での指導講評
 - ③ メンター研修での指導助言指導教諭の指導を通して、本校の算数科の授業スタイルが確立することができた。
- 「話し合う活動を通じて考えを深めたり広げたりしている」児童は88%であった。前年度の82%よりも6ポイント増加している。日々のいろいろな学習で話し合う活動を取り入れた事が増加した理由であろうと考える。引き続き、あらゆる学習の中で話し合いなどの言語活動を意識して取り入れていきたい。
- 「一輪車や遊具を使って体を動かすことは楽しいですか」という設問に対して71%がとても楽しい、25%が楽しいと回答した。コロナ禍の中でも児童が運動に興味を持ち楽しいと感じる肯定的な回答が96%になったことは前向きに評価できると考える。今後も児童の興味関心を高めながら運動することの楽しさや喜びを体験させていきたい。
- 児童の学習端末は、毎朝、起動し、心の天気を入力して一日が始まるということを基本ルーティーンとして全児童がPC操作を簡単に感じるようにさせていく。そして、日々の学習でも活用を図っていく。「学校でパソコンやタブレットを使っていますか」の問いに72%の児童が「ほぼ毎日使っている」と回答をしている。今後はさらに効果的な場面で活用を推進したい。
- 2020年の学習指導要領の改訂後、コロナ禍もあり、教員の負担感が増す一方である。その中で、行事精選や活動の見直しを行い教員の教育環境が過度にならないようにしているところである。これまでも、ゆとりの日を設定していたが、今年度は週1回のゆとりの日を設定した。今後も確実な運用を図る。

中期目標

【安全・安心な教育の推進】

- ・小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を90%以上にする。
- ・年度末の校内調査において不登校児童の在籍が0となるようにする。
- ・「学校のきまりを守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を95%以上にする。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- ・小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を50%以上にする。
- ・小学校学力経年調査における国語および算数の標準偏差値を102以上を維持する。
- ・小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を80%以上にする。
- ・小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を80%以上にする。

【学びを支える教育環境の充実】

- ・「日々の授業の中で学習者用端末を利用して学習している」の項目について、「ほぼ毎日」と答える児童の割合を95%以上にする。
- ・教員の勤務時間の上限に関する基準を満たす教職員の割合（時間外勤務時間が45時間以内、1年間の時間外勤務時間が360時間以下）を60%以上にする。

2 中期目標の達成に向けた年度目標

【最重要目標1 安全・安心な教育の推進】

- ・年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を93%以上にする。
- ・年度末の校内調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を92%以上にする。
- ・年度末の校内調査における「自分にはよいところがあると思いますか」に対して、肯定的に答える児童の割合を92%以上にする。

学校の年度目標

- ① 令和7年度末の校内調査において、新たに不登校になる児童の割合を前年度より減少させる。

【最重要目標2 未来を切り拓く学力・体力の向上】

- ・年度末の校内調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を56%以上にする。
- ・年度末の校内調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を70%以上にする。

学校の年度目標

- ① 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対全国比6割以下の児童を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1人以上減少させる。
- ② 漢字検定(3年生以上)の合格率を80パーセント以上にする。

【最重要目標3 学びを支える教育環境の充実】

- ・授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く〕
- ・第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1（時間外勤務時間が月45時間以内、1年間の時間外勤務時間が360時間以下）を満たす教職員の割合を50%以上にする。

3 本年度の自己評価結果の総括

【安全・安心な教育の推進】に関しては、取組内容①は、指標としてあげていたアンケート結果が目標値を3.5%上回ることができたためA評価とした。取組内容②③は、指標としてあげていたアンケート結果等が目標値と概ね同等であったためB評価とした。取組内容④は、指標としてあげていたアンケート結果が目標値と同程度であったためB評価とした。

また、4つの年度目標に関しては、目標としていた数値に対して概ね同等であったため、全体としてはB評価とした。

3つの中期目標については、1つめは5.5%上回り、2つめは達成できず、3つめは1.7%届かなかった。

児童のいじめに対する意識の向上が顕著に見られ、登校を楽しんでいる児童も増加傾向にある。しかし、中には否定的にとらえている児童もいるため、引き続き個に応じた指導・支援を継続していく必要がある。また、不登校に関しても課題があるが、不登校傾向が見られる児童に対して、チームで対応することで改善が図られ、登校できるようになったケースもあり、成果も見られた。今後も保護者はもちろん、関係機関やSC・SSWとの連携を図りながら、不登校児童の解消に努めていきたい。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】に関しては、取組内容①は、指標としてあげていたアンケート結果が目標値とほぼ同程度だったためB評価とした。取組内容②③は、指標としてあげていたアンケート結果等が目標値と概ね同等か上回ることができたためB評価とした。取組内容④⑤は、指標としてあげていたアンケート結果等が目標値を下回ったためC評価とした。

また、4つの年度目標に関しては、目標としていた数値に対して下回るものもあったが、概ね同等か上回ることができた目標もあったため、全体としてはB評価とした。

4つの中期目標については、1つめは5.9%上回り、2つめは達成でき、3つめは3.3%上回り、4つめは16%届かなかった。

国語科の校内研究を通して、話し合う活動の充実が図られ、指標を上回り成果が上がった。しかし、体力の向上と学力における下位層への指導、支援に関しては課題が残っているため、学力・体力向上につながる児童の主体的な取組を作り上げていきたい。

【学びを支える教育環境の充実】に関しては、取組内容①は、指標としてあげていたアンケート等の結果が目標値と同等であったためB評価とした。取組内容②は、ゆとりの日の設定で早めに退勤しようとする意識が浸透し、時間外労働の抑制につながっており、業務分担も徐々に進んできているためA評価とした。

また、2つの年度目標に関しては、1つめについては、ICT機器の活用率はあがっており、8割以上の児童が活用している日数は年間授業日の75.5%となり、目標数値を上回った。2つめについては、目標としていた数値を上回ることができた。この結果を踏まえ総合的に判断し、B評価とした。

2つの中期目標については、1つめは上回り、2つめは30%程度上回ることができた。

学習者用端末の活用は進んできているため、学習中での活用も含め、さらに活用を進めていきたい。また、業務分担の明確化を図り、業務の負担を減らしていくとともに、学校行事などの精選も進めていきたい。

今年度も地域・保護者の皆様のご理解・ご協力と教職員の努力によって、概ね今年度の目標を達成することができたと考える。今回の結果を受け、いくつかの課題が明らかになったため、今後も児童一人一人が大切にされ、安全・安心な学校を実感できる取組を継続するとともに、学力・体力向上の取組と学びを支える教育環境の充実に向け、働き方改革に関する取組も継続しながら、よりよい学校運営を推進していきたい。

大阪市立難波元町小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p>【最重要目標1 安全・安心な教育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を93%以上にする。 ・年度末の校内調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「そう思う」と回答する児童の割合を92%以上にする。 ・年度末の校内調査における「自分にはよいところがあると思いますか」に対して、肯定的に答える児童の割合を92%以上にする。 <p>学校の年度目標</p> <p>① 令和7年度末の校内調査において、新たに不登校になる児童の割合を前年度より減少させる。</p>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【基本的な方向1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <p>児童理解を深め、いじめの未然防止と早期発見、早期対応をすすめる。</p> <p>指標： いじめについて考える日、いのちについて考える日、毎月の児童理解研修会を実施し、年度末の児童アンケートで「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の項目で、最も肯定的な「思う」と回答する児童を92%以上にする。</p>	A
<p>取組内容②【基本的な方向1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <p>きまりを守ることによって学校生活を楽しむことができたり、安全に活動をすすめることができたりするという場面を数多く経験させる。</p> <p>指標： 今年度末の児童アンケートで「学校に行くのは楽しい」と回答する児童を93%以上にする。 今年度末の児童アンケートで「学校の決まりを守っている」と回答する児童を93%以上にする。</p>	B
<p>取組内容③【基本的な方向1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <p>不登校傾向のある児童の早期発見、早期対応をすすめる。</p> <p>指標： 児童理解研修会、スクリーニングシート、心の天気の利用を通して、新たに不登校になる児童の割合を前年度より改善させる。</p>	B
<p>取組内容④【基本的な方向2 豊かな心の育成】</p> <p>たてわり班活動や各学校行事を通して、児童の自己肯定感を高める。</p> <p>指標： たてわり遊び、たてわり清掃、オリエンテーリング、各学校行事を通して、年度末の児童アンケートで「自分には良いところがあると思う」の項目で、肯定的な回答をする児童の割合を92%以上にする。</p>	B

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析

【取組内容①について】

各学年・各学級で事象に対応し、管理職に報告している。児童理解研修会やいじめについて考える日で気になる児童について報告し、全教職員で共通理解した。年度末の児童アンケートで「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の項目で、最も肯定的な意見が95.5%（年度目標より3.5%増）、肯定的な意見が99.1%になった。

【取組内容②について】

「学校に行くのは楽しい」の項目では、肯定的な意見が91%（年度目標より2%減）。高学年、中学年の肯定的な意見の割合が85%と昨年度よりも減少している。

「きまりを守る。」の項目では、肯定的な意見が93.3%（増減なし）になった。安全に活動を進める環境づくりを教職員で協力してできてきているが、生活見直し週間などでは、「廊下、階段の右側を歩く。」などの項目で決まりが守れていない児童が多く見られる。

【取組内容③について】

不登校傾向にある児童の情報共有を教職員で行いった。保護者とも連絡を取り合い、時には家庭訪問するなど改善に努めた。不登校傾向だった児童も少しずつ登校することができている。

【取組内容④について】

「自分には良いところがある。」のアンケートでは肯定的な意見が91.9%（年度目標より0.1%減）となったが、高学年を中心として、たてわり清掃やたてわり遊びを実施しすることでいきいきと活動することができた。

【中期目標の1つめについて】

小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合は95.5%となり、5.5%上回って目標を達成することができた。

【中期目標の2つめについて】

年度末の校内調査において不登校児童の在籍は8名となり、0にすることはできず、目標を達成することができなかった。

【中期目標の3つめについて】

「学校のきまりを守っていますか」に対して、肯定的に回答する児童の割合は93.3%となり、1.7%届かず目標を達成することができなかった。

次年度への改善点

【取組内容①について】

「いじめの早期発見、防止」については学校全体で取り組むことができている。小さなことでも管理職に報告し、適切に対応できている。

「いじめは絶対にいけないこと」の項目で最も肯定的な意見が年度目標よりも上昇した。ただ、やや否定的な意見の児童がいることも確かである。来年度、否定的な意見が出ないように子どもたちの様子を見て、話をしっかり聞き、トラブルを解消していく。

【取組内容②について】

「学校に行くのは楽しい」の項目では、年度目標より減少している。楽しくないと答える児童が中学年・高学年で合わせて30%近くもいるので、児童に話を聞く、普段の様子をしっかりと見る、また保護者と連絡を取り、家での様子なども把握して対応していく。

「学校のきまり」の項目では93.3%と年度目標と変わりなかった。朝会や学級指導、代表委員会で取り組みを行っているので、来年度も継続して行うことが必要である。

【取組内容③について】

昨年度、不登校傾向だった児童も少しずつではあるが登校することができている。保護者と連携を取りながら、改善に向けて今後も取り組んでいく。

【取組内容④について】

「自分には良いところがある」の項目で、肯定的な意見が年度目標よりも0.1%減少した。ただ、高学年を中心にたてわり班活動を行い、中・低学年をしっかりと見ることができているとともに、活躍の場も作れていると思う。ただ、否定的な意見の児童もいるので様子を見つめて、学級やたてわり班活動などでもできていることなどの良いところをほめたり、良い点を伝えたりするなど自己肯定感を高めていけるようにしなければならない。

大阪市立難波元町小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p>【最重要目標2 未来を切り拓く学力・体力の向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度末の校内調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「当てはまる」と回答する児童の割合を56%以上にする。 ・年度末の校内調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を70%以上にする。 <p>学校の年度目標</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率6割以下の児童を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1人以上減少させる。 ② 漢字検定(3年生以上)の合格率を80パーセント以上にする。 	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【基本的な方向4 誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>すべての教科・領域において話し合い活動を深めるため、自分の思いや考えを書いたり、交流したりする学習を取り入れる。</p> <p>指標： 今年度の児童アンケートにおける「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的に回答する児童の割合を、令和6年度（55.3%）より増加させる。</p>	B
<p>取組内容②【基本的な方向4 誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>全学年での研究授業・公開授業、脳トレを通して、計算力や漢字能力などの基礎学力を高める指導法のあり方を模索する。</p> <p>指標： 今年度の小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率6割以下の児童を同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より減少させる。</p>	B
<p>取組内容③【基本的な方向4 誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>C-NET、日本語指導ポータルと連携した授業を進めるとともに、デジタル教科書の活用を図る。</p> <p>指標： 今年度末の児童アンケートで「外国語(英語)の学習は好きですか」に対して、肯定的に答える児童の割合を82%以上にする。 「学校に行くのは楽しいですか」に対して肯定的な回答をする日本語の指導が必要な児童の割合を60%以上にする。</p>	B
<p>取組内容④【基本的な方向5 健やかな体の育成】</p> <p>体育科学習や学校行事などを通して、体を動かすことの楽しさを経験させる。また、宿泊学習で多様な体験を通して健やかな心と体を育成する。</p> <p>指標： 今年度末の児童アンケートで「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合を70%以上にする。</p>	C
<p>取組内容⑤【基本的な方向4 誰一人取り残さない学力の向上】</p> <p>漢字の定着を図るために脳トレに取り組む。</p> <p>指標： 漢字検定(3年生以上)合格率を80パーセント以上にする。</p>	C

【取組内容①について】

国語科の学習を中心に自分の考えを伝え合う活動の指導に力を入れてきた結果「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的に回答する児童の割合は、55.9%となり、昨年度の55.3%を上回った。高学年は、42.6%、中学年は、37.7%、低学年は、78.3%であり、特に低学年では、高い成果が見られた。また、大きな成果として挙げられるのは、否定的な回答をした児童が14.2%から8.6%へと大きく減少した点である。これは、全校体制での対話的な学習展開や「伝え合いカード」等の支援ツールの改善、児童の実態に合わせた掲示物の工夫など、教員の試行錯誤が実を結んだ結果であると考えられる。

【取組内容②について】

今年度の小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率6割以下の児童を同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より減少させるにおいては、4年生は国語21人から10人、算数12人から10人に減少。5年生は国語6人から6人、算数7人から9人に微増。6年生は国語6人から5人、算数12人から9人に減少。学年や教科により違いはあるが、全体的に減少傾向にある。

【取組内容③について】

「外国語（英語）の学習は好きですか」に対して、肯定的に答える児童の割合は、83.3%に達し、目標を上回ることができた。高学年は78.6%、中学年は75.3%、低学年は92%であり、例年よりも高学年の割合が高い傾向にあった。また、日本語の指導が必要な児童については、日本語指導サポーターとの連携により、学習参加への意欲が高まっている。学習面だけでなく、きめ細やかな関わりによって学校生活における困り感や不安が解消されつつある。しかし、日本語指導教室の時数確保や日本語指導サポーターの人員不足といった体制面の課題は依然として残っている。

【取組内容④について】

「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合が、低学年62.0%、中学年69.6%、高学年60.7%、全体で64.0%と目標達成とはならなかった。今年度は毎学期に体力向上週間を実施し、多くの児童が期間中に業間運動に取り組むことができた。しかし、期間外は運動場で遊ぶ児童が固定化しており、おにごっこやドッジボールを主とした運動場での遊び方など、遊具やサッカーボールもあるが、遊ぶ選択肢が少なかったり、遊び方を知らなかったりする児童が多いのではないかと考えられる。

【取組内容⑤について】

漢字検定（3年生以上）合格率は、70%と、目標の80%を達成することができなかった。昨年度と同様、「漢字の先取り学習」について、4月から継続しては行っていない。その中で検定直前には「書き順」の確認問題に「単漢字の復習」を兼ねて取り組んだ。

【中期目標の1つめについて】

小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合は55.9%となり、5.5%上回って目標を達成することができた。

【中期目標の2つめについて】

小学校学力経年調査における国語および算数の標準偏差値を102以上に令和5年度から7年度まで維持することができたため、目標を達成することができた。

【中期目標の3つめについて】

小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合は83.3%となり、3.3%上回って目標を達成することができた。

【中期目標の4つめについて】

小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童の割合は64%となり、16%届かず目標を達成することができなかった。

次年度への改善点

【取組内容①について】

昨年度に比べ否定的な回答が減少したのは、自分の考えを伝え合う活動を継続した成果だといえる。今後は「伝え合いカード」を支援ツールとして定着させるとともに、児童の実態に即した「対話を活性化させる言葉や態度」を掲示するなど、伝え合う力を高める指導を継続する。また、国語科で培った力を他教科へも波及させ、全教育活動を通じた伝え合いの活性化を図る。

【取組内容②について】

今年度の小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率 6 割以下の児童の人数は減少傾向にあるが、学習に課題を抱える児童は依然として各学級にいる状態である。今後は、個々の学力実態に応じた指導方法（個別最適な学び）をさらに検討し、つまづきに寄り添った「わかる授業」を追求していく必要がある。

【取組内容③について】

引き続きモジュール学習の時間を確保し、C-NETの先生が低学年とも積極的に関わる機会を設けるなど、英語（外国語）に親しむ場を増やしていく。また、日本語指導サポーターとの連携をさらに深めるとともに、デジタル教科書などのICT機器を有効活用し、支援の充実を図っていく。

【取組内容④について】

次年度では、体力向上週間を継続して取り組むことはもちろん、運動場での遊びの種類を増やしたいし、知らせたいと考える。例えば、運動委員の児童たちに「運動場での色々な遊び方」を提案させるなど、児童が知ったことや見つけたことを広げられるようにしたい。また、各学級にボールやドッチビーなど道具を増やしたり、それらを使いやすくするために授業の中に組み込んだりするなどを考えていきたい。

【取組内容⑤について】

児童の母数を考慮に入れると、あと 10 人ほどの合格者が出れば目標を達成することができる。不合格者（39名）の実態をみると、

- ① あと数点で合格（12名）
- ② 合格点にあと20点程度（7名）
- ③ 合格点に20点以上到達していない（20名）

となっている。

①②のグルーグループの中には、学力の実態に合わせ受験級を変更した児童も多く、昨年度に比べて受験級の調整は浸透してきている。ただ、③の上位級（5・6・7級）受験者の中に学力実態と受験級実態が合致していない児童が依然としてみられる（前年度、学年相応級に合格していないのに本年度学年相応級を受験している）。引き続き受験級調整の徹底を図るよう努めていく必要がある。

また、「脳トレ」での漢字の取り組みを「漢字検定実施日以降に学習する漢字の習得」「漢字検定の類題」に絞り、普段の漢字の学習の確実な定着と合わせ、より効率よく取り組むことのできる場の設定を継続して行う。

大阪市立難波元町小学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p>【最重要目標3 学びを支える教育環境の充実】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等ICT活用が適さない日数を除く〕 ・第2期「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間の上限に関する基準1（時間外勤務時間が月45時間以内、1年間の時間外勤務時間が360時間以下）を満たす教職員の割合を50%以上にする。 	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【基本的な方向6 教育DXデジタルトランスフォーメーションの推進】</p> <p>心の天気を毎日入力できるよう時間の確保をしたり、学習者用端末を日々の授業で利用したりする。</p> <p>指標： 令和7年度末の児童アンケートの「学校でタブレットを使っていますか」の項目について、「ほぼ毎日」と答える児童の割合を、97%以上にする。</p>	B
<p>取組内容②【基本的な方向7 人材の確保・育成としなやかな組織づくり】</p> <p>教員の過重労働を抑制するために、ゆとりの日を週1回設けるとともに、業務分担の明確化を図る。</p> <p>指標： 業務内容の改善、見直しを進めたり、ゆとりの日には勤務時間終了後速やかに退勤したりする。</p>	A

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析

【取組内容①について】

本校では、「学習者用端末を日常的な学習活動に位置付ける」ことを目標とし、授業における計画的活用及び日々の「心の天気」入力継続実施、校内研修を通じた指導方法の共有・改善に取り組んできた。その結果、授業日において児童の80%以上が端末を活用した日は年間授業日の75.5%となり、日常的活用が一定程度定着していることが確認できた。また、令和7年度末の児童アンケート「学校でタブレットを使っていますか。」では、「あてはまる」85.6%、「どちらかといえばあてはまる」12.6%であり、肯定的回答は98.2%であった。多くの児童が、端末を日常的に活用していると認識していることが明らかとなった。

これらの成果は、教職員による継続的な活用促進及び研修を通じた授業改善の積み重ねによるものと考えられる。また、学習者用端末を特別な機器ではなく、学習を支える基盤的な道具として捉える意識が児童に浸透してきたことが示唆される。さらに、本年度の改善課題であった「端末の故障の多さ」については、取扱方法に関する継続的指導及び家庭との連携を図った結果、故障件数は昨年度の約3分の1に減少した。取組の有効性が確認できた。

【取組内容②について】

- ・ 4月より時間外勤務時間が月45時間以内を満たす教職員の割合は95%より下回ることなく推移している（1月までの集計）。また、8月以降は同割合が100%で推移している。さらに、8・11・1月はすべての教職員の時間外勤務時間が月30時間以下となった。
- ・ 「ゆとりの日」は教職員に浸透しており、退勤時刻の1時間後にはほぼすべての教職員が退勤している現状がみられる。ただ、持ち帰りPCの利用も多く、業務軽減の観点からは根本的な解決に至っているとは判断しづらい面もみられる。また、業務の主担当集中は以前に比べ改善されつつあるが、業務分担がなされていない現状もみられる。

【中期目標の1つめについて】

「日々の授業の中で学習者用端末を利用して学習している」の項目について、「ほぼ毎日」と答える児童の割合は98.2%となり、3.2%上回って目標を達成することができた。

【中期目標の2つめについて】

教員の勤務時間の上限に関する基準を満たす教職員の割合(時間外勤務時間が45時間以内、1年間の時間外勤務時間が360時間以下)は95%となり、30%程度上回って目標を達成することができた。

次年度への改善点

【取組内容①について】

次年度は、活用の「量」の定着を踏まえ、「質」の向上を重点課題とする。具体的には、「多様な子どもたち一人一人の主体的・対話的で深い学びの実現」を目指し、紙媒体と ICT 機器を対立的に捉えるのではなく、それぞれの特性を生かした最適な学習環境の構築を図る。また、教職員の ICT 活用指導力のさらなる向上を目的として、計画的かつ継続的な校内研修を実施し、実践事例の共有及び活用方法の深化を進める。これにより、学習効果を高める活用への転換を図る。

【取組内容②について】

業務分担の明確化をはかり、業務の負担を減らすとともに、取り組み内容や時期の精選を行っていく。また、「教職員の時差勤務」制度を活用し、各教職員のワーク・ライフ・バランスの推進を図る。